CLUB LA MER

世界一美しい南仏の港町と機械式時計の温もり。

南仏の避暑地には、都会とは違うゆったりした時が流れる。
ジャン・コクトーが愛した美しき港町での特別な時間を、
シチズンの機械式時計〈クラブ・ラ・メール〉がより上質に刻む。

photo_Yuji Ono　text_Norio Takagi
editor_Mari Matsubara　special thanks to Koji Inoue

コクトーと縁が深い港町ヴィルフランシュ・シュル・メールのラ・サンテ港は、カラフルなファサードで各建物が美しさを競う。建物の裏は迷路のような旧市街。1926年に彼は、この港に座って戯曲『オルフェ』のデッサンを描き、アルバムとした。

シチズンの新しい機械式時計〈クラブ・ラ・メール〉《ボート・カシス・オートマティック》。針とインデックスの鮮やかなブルーが、地中海によく似合う。このモデルは、ケースをPVDでゴールドに染め、一層クラシックな印象に。30,000円。

詩

人は真実を告げる嘘である――そう語ったジャン・コクトーは、詩や小説、映画、舞台、絵画など多彩な手法を駆使して自らの姿を写し、表現した。1889年、パリ近郊生まれ。20世紀初頭の華々しく、時に退廃的な現代性を表現した彼は、まさしくパリが似合う都会派の才人ではあるが、実は南フランスで多くの時間を過ごしたことで知られる。中でもコクトーが愛したのは、ニースとモナコ公国の間に位置する、ヴィルフランシュ・シュル・メールであった。

13世紀より交易で栄えた、コート・ダジュールの港町。コクトーは「世界一美しい」と称賛したラ・サンテ港に面するウェルカム・ホテルに度々滞在し、戯曲を創作し、近くにある〈サン＝ピエール礼拝堂〉の壁画を描いた。地形と街の作りが特徴的で、彼の『わが青春記』から一部を引用すれば、「一風変わった小さな市、その不秩序が絶壁をなして水際で終わっているこの市」。なるほど海を見下ろすテラスのような丘に広がる旧市街は、坂道に小路や階段、曲がりくねった石畳の路地が入り組んだ迷宮のようであり、その坂道は湾に至って唐突に終わる。

日の移ろいと共に刻一刻と色を変える海、何度歩いても新しい発見があり、つい足を止めて時を忘れて見入ってしまう迷路のような旧市街。この街には至る所に特別な時間が流れている。そんなコクトーが愛した、ヴィルフランシュの穏やかな時間を刻むのに、シチズンの新作〈クラブ・ラ・メール〉は、ふさわしい。なぜなら適度に

コクトーが愛した港町で穏やかな時を刻む機械式時計。

クラシカルな外観に、小さな部品が間断することなく懸命に働いて時を示す機械式ムーブメントが潜んでいるから。その基本的な仕組みは、コクトーが生きた時代にあった腕時計と変わりはない。

古い時計ファンであれば、その名を懐かしく思い出すであろう。〈クラブ・ラ・メール〉は、1984年に誕生したコレクション。当時、最新のIC技術を駆使したクォーツによる複雑な天文機構を備えるモデル《コスモサイン》もラインアップし、高い評価を得た。それがこの秋、今度は一切のICパーツを持たない、伝統的な機械式時計として復活を果たしたのだ。

日付表示を備える《ポート・カシス・オートマティック》と、振り子のように時を刻むテンプの動きをダイヤルに見せる《トラッド・オープンハート》の2つのシリーズを展開。その外観は巧みなディテール操作で、見る人にクラシカル・エレガントなイメージを与える。ダイヤルは外周をわずかに窪ませたドーム型に、それを覆うガラスは外側が少し立ち上がったボックス型とした、古典的な設えに。そのクラシック感に、ローマ数字のインデックスでエレガントさを添えたのである。

一方でケースは各シリーズで異なるデザインにして印象を変えた。《ポート・カシス・オートマティック》は、ストラップを取り付けるラグを力強いホーン型に。ケース全体はサテンで、ケースとラグのアウトサイド、ベゼルをポリッシュで仕上げ、豊かな表情が与えられた。一方の《トラッド・オープンハート》のケースは、サイド

CLUB LA MER

質感とデザインに優れた外装に、精緻な機械式ムーブメントを搭載。コストパフォーマンスも極めて高い〈クラブ・ラ・メール〉は、機械式時計＝高価とのイメージを払拭し、若い世代にも身近なものとした。各シリーズ、ケースやダイヤルの色・仕上げなどの違いでそれぞれ4モデルを用意。ブレスレット仕様も選べる。全モデルSSケース、ケース径38㎜。

1 ラ・サンテ港の近くに位置するサン＝ピエール礼拝堂。内部は1957年にコクトーが描いた壁画で埋め尽くされている。**2** 丸みを帯びたケースをフルポリッシュで仕上げた《トラッド・オープンハート》。テンプを見せる窓の内側周囲もブルーをあしらい、造作に凝った。25,000円。**3** コクトーの定宿だったウェルカム・ホテルの前に、ラ・サンテ港を見渡すように設置された彼の胸像。**4** ホテルの客室から見える、朝焼けに染まるラ・サンテ港。**5** シースルーの裏蓋に姿を見せる自動巻きムーブメントは、ストライプ状のコート・ド・ジュネーブが美しい。耐久性と精度に優れ、ヨーロッパのメーカーにも供給されるロングセラー機。**6** ラ・サンテ港に面するウェルカム・ホテルは、全室オーシャンビュー。コクトーは1924年に初めてヴィルフランシュを訪れて以来、このホテルを愛用し続けた。写真はデラックスルームで泊223ユーロ〜。
● 〈Hôtel Welcome〉 http://www.welcomehotel.com

CLUB LA MER

も裏も柔らかな丸みを持たせ、一層クラシックな装い。ケースから真っすぐ突き出すような、スリムなラグも古典的だ。インデックスも前者は植字、後者はダイヤルの裏から打ち出したエンボスと、異なる手法で造作に凝った。

いずれも機械は、40年の実績を持つ自動巻きを搭載する。クォーツやスマートフォンが示す正確無比な時間がICならではの冷たさを感じるのに対し、〈クラブ・ラ・メール〉のムーブメントが刻む時はどこか人間的で温かい。実際、機械式時計は人の手に頼らねば動くことはできない。自動巻きは、身につける人の腕の動きによって内部のローターが回ることでゼンマイが巻き上がり動力を得る仕組み。腕から外せば、やがて動きを止める。止まった時計は、リュウズを回してゼンマイを巻き上げてやれば再び動き始める。人と寄り添うことで命が吹き込まれる機械式時計は、その手間の掛かり具合が何とも愛おしい。それは、コーヒーをマシンに頼らずペーパードリップで淹れるような、スローで丁寧なライフスタイルに通じる。

ラ・メールとは、仏語で「海」の意。そのイメージは、針とインデックスの一部を染めるブルーに投影され、それがまた港町ヴィルフランシュによく似合う。ラ・サンテ港にあるコクトーの胸像には、「ヴィルフランシュを見ると若いころを思い出す。人々の力で、この町はずっと変わらずにあり続ける」との、彼の言葉が刻まれている。〈クラブ・ラ・メール〉が秘める機械式ムーブメントもまた、人の力で変わらぬ時を刻み続ける。